

フランス
イギリス
スペイン
ドイツ
北欧
ロシア
日本
ブラジル
中南米

オーディオ

インフォ

補聴器専門誌

AUDIO
INFOS

www.audio-infos.jp

03

第54回
日本聴覚医学会総会
学術講演会



メーカー訪問
ジーエヌリサウンド ジャパン



ロシアから
線路が運ぶ聴覚治療



耳かけ型のどれを選ぶ？

さまざまな装用方法

青年聴覚障害者の 職場環境の改善を 医院スタッフがチームで支援



講演会場（大山医院の発表とは関係がありません）

2009年10月22日-23日、新横浜プリンスホテルで、第54回日本聴覚医学会の総会と学術講演会が開催された。主催は北里大学耳鼻咽喉科で、同大学の岡本牧人教授が会長を務めた。今年の学術発表のテーマは、「両耳補聴をめぐる諸問題」、「特発性両側性感音難聴-最近の臨床」の2つ。2日間で167の学術発表があり、毎回の発表の後に活発な討論がなされた。

前号の出展ブース紹介に続き、今号ではその中から、社会的な問題を提起した発表を紹介する。青年聴覚障害者が就職後にどんな困難に突き当たるかを報告するとともに、支援する医療スタッフには何ができるかを提案している。

青年聴覚障害者の職場環境における支援

坂井純二（補聴器技能者）、鶴田美津（言語聴覚士）、
大山政郎（耳鼻咽喉科医）（医療法人 大山医院）

1989年の開院以来、聴覚障害児・者の自立を支援している同院は、青年聴覚障害者2人を例に挙げ、聴覚障害者が抱える職場や社会での問題点を改善する必要性があると提言した。

最初の例は、27歳の男性。右耳82.5dB、左耳92.5dB。製造メーカーで5年間営業をしている。

営業の仕事では、人との接触が多い。この男性の場合、会議などでの聞き取り困難が精神的な負担になり、耳鳴りやめまいも出てきた。入社当初から、会議でのFM補聴システム使用を会社に申請してきたが、当初は値段の高さから購入は受け付けられなかった。その後、同医院よりFM機器の貸出しを受け、会議での効果を実証した上で再度会社に申請。会社も産業医への相談により、聴覚障害と聴覚障害者の補聴システムの必要性を理解し、晴れて会社の費用で購入してもらうことができた。

第2の例は、25歳の女性。右耳60.0dB、左耳は113.0dB。病院に薬剤師として就職したときに、困難に出会った。電話の呼び出しに気づきにくく、電話の音声も聞き取りにくいため、一人で当直することに不安、上司の指示も聞き取りにくかった。電話対応の免除などを職場に提案したが、改善されなかったため、調剤薬局への転職を希望した。新しい職場では、同医院からのアドバイスにより、面接の段階から自身のきこえの状態や希望する配慮を話せたこともあり、職場での聴覚障害に対する配慮が得られ、問題なく1年6ヶ月勤務している。

来院した青年聴覚障害者を診察したとき、症状だけでなく生活面にも話が及ぶと、職場でのコミュニケーションの悩みや不安が浮き上がってくることが多い。この発表では、同医院のスタッフがチー

ムとして患者の訴えをよく聞き、症状の背景にある問題を把握すること、改善策を共に考えていくことの重要性が指摘された。

補聴器の効果に期待していなかったり、補聴器についての情報不足、経済的負担の大きさから、自発的に聞こえを良くしようという人は少なかったという。

前述の例のように、産業医への働きかけで職場の理解が得られ、環境改善に成功した例もあるので、産業医への働きかけの大切さも強調された。

当事者が聴覚障害者のサークルに参加し、同じような悩みを持つ人たちと話し合うことで、精神的負担が軽減し、職場環境の改善につながる事が大きい。聴覚専門家は、そうしたサークルの良きアドバイザーとしての役割を果たすことが要求される、として発表が締めくくられた。

講演会後の電話インタビューで、難聴を専門にしてきた大山政郎院長は、「学校教育では難聴児対策ができるようになったが、卒業後、社会に出てからのケアができていない。彼らが相談できる人が少なく、相談できる場所もない」と、現状の不備を訴え、「聴覚障害に対する社会の理解を更に得られるよう、啓発活動をしていくことが大切。支援機器の整備についても、補聴器メーカーの協力を期待したい」と話した。

身体的な不調だけでなく、心の悩みまで聞き取ったうえで、適切な補聴器や補聴器システムを提案し、さらに勤め先など、周囲の環境にも働きかける。それには、大山医院のように、聴覚の専門家たちがチームを組んで行うことが効果的だろう。このようなチームが日本中に増え、聴覚障害者や聴覚障害児に対する支援を地道に行っていけば、聴覚障害に対する社会の理解もしだいに高まっていくのではないだろうか。

写真・文 羽生のり子

Japan Audiology Society the 54th congress (2)

The 54th congress of the Japan Audiology Society was held in October 22 -23 2009 in Yokoyama city.

This year, ENT of Kitazato University organized the congress. The president of the congress was Professor Okamoto Makito of this university. In two days, there were 167 scientific conferences. Audio Infos presents one of these conferences which asked a social question about young impaired people.

Working environment support for young hearing impaired people

Ooyama Clinic: SAKAI Junji, TURUTA Mitsu and OYAMA Shiro

Ooyama Clinic is supporting the autonomy of hearing impaired people and children since the opening in 1989. They suggested the necessity of enhance problems that hearing impaired young people encounter in working place and the society. They presented two examples.

1) A 27 years old sales man working five years. He was suffering from hearing difficulty in meeting. The clinic's audiologists helped him so that his company buys a FM hearing system for him. 2) 25 years old pharmacist. She did not hear well telephone conversation. She asked the hospital so that she could opt out of the task, but no improvement was done. She changed working place. With advices of the Ooyama Clinic, she talked about attention she needed at the interview. People in her new working place understood

her and now she is working with satisfaction. The audiologists in Ooyama Clinic pointed out the importance of listening patients' pleading to figure out the background of the problem. The approach to employment medical advisor is also useful. Hearing impaired persons' group gives a chance to them to talk with the people having similar problems. Ooyama Clinic's audiologists hope their colleague to be a good advisor of hearing impaired people's group.